

## ゲーテの「ファウスト」の面白さについて

中 野 和 朗

はじめに

ゲーテの「ファウスト」について、これまですでに、さまざまな観点から膨大な書が著わされていて、全て語り尽くされた感さえある。だから、あらたに何かを書き加えるのは屋上に屋を重ねることになるにちがいないと思われ、ためらいと気おくれを禁じざるを得ない。しかもこの作品は、一般的に偉大な作品で、難しく、時として冗長で退屈でさえあるというのが定評となっている。だから、そういう作品の面白さについて語るなどというのは、いかにも奇を衒っているとの誹りを免れえないであろう。

「ファウスト」は、作者自身によって「悲劇」(Tragödie)と名付けられており、何処から眺めても正真正銘のドラマであるにも拘らず、時間的にも空間的にも想像を絶する劇的広大さや、複雑多彩に展開する筋立てなど、およそ従来の常識的理解を超えているため、舞台上で演ずることは不可能との観方が生まれた。そして「ファウスト」は、演じられるドラマ(Spieldrama)ではなく、読むドラマ(Lesedrama)という見解が主流となった。例えば、「私たちがいわばナイーブな読者として作品『ファウスト』を読んだ時、何処が魅力的なのか、何が私たちの心をとらえるのか、——そういうようにして作品『ファウスト』の魅力を探って行った時、例えばその時代と文化の問題も自ずと姿を現わしてくるはずですし、われわれの時代と文化との関わりも見えてくるはずです。それは一口に言えば、『ファウスト』を文学作品として読むということです。」<sup>(1)</sup>(傍点は筆者)という主張は、たしかに、「ファウスト」は、哲学書とか道徳の本あるいは、人生論として読まれるべきではないという意味で述べられたものであるにせよ、「ファウスト」の魅力は、「演じられるドラマ」として読むことによってこそ発見できるという主張ではなく、やはり伝統的な「読むドラマ」としての視点からの発言である。この視点から「ファウスト」を読むと、おしなべて、この中から深遠な哲理や、崇高な人生訓といったものを学び攝ろうとする誘惑に呪縛されてしまうもののようである。

「とにかくドイツ人というのは奇妙な人間だ!——彼らはどんなものにも深遠な思想や理念を探しもとめ、それをいたるところにもちこんでは、そのおかげで人生を不当に重苦しいものにしていく。——さあ、もういいかげんに勇を奮って、いろんな印象に熱中してみたらどうかね。手放しで楽しんだり、感激したり、奮起させられたり、また教えに耳を傾けたり、何か偉大なものへの情熱を燃やして、勇気づけられたらどうかね。」<sup>(2)</sup>というゲーテ自身のことは、この「ファウスト」を受け止める態度についてたいへん暗示的である。これはとりも直さず「ファウスト」を「読んで学ぶドラマ」から、「演じられて享受されるドラマ」への解放を期待したものと聞くこともできる。

「ゲーテは晩年しばしばこの作品が、笑談(Scherz)と真剣さ(Ernst)の結合であると説明している。死ぬ5日前(1832年3月17日)ヴィルヘルム・フォン・フンボルトへの手紙

で、『この非常に真剣な笑談』と言っている。〈笑談〉というのは遊び、たわむれの意味である。作者自身、想像力を自由奔放に働かせて、奇想天外な思いつき、とっぴな連想、軽妙なユーモアを楽しんでいるが、それは読者・観衆を驚かせ、笑わせ、ぞっとさせ、またほろりとさせ、ときにはうっとりさせたり、しみりと考え込ませる。崇高、深遠なものから、優美、華麗、滑稽、ユーモア、さらに不気味、グロテスクと、美学的カテゴリーのすべてを尽くしている。これらの変幻きわまりない交代に、この遊びがある。そしてこの作品の冒頭の『劇場での序幕』は、読者・観衆との関係における一種の美学のプログラムと言うべきものだが、その中で〈道化役〉の口を借りて、Spaß（笑談、笑い、楽しさ、娯楽）こそが文学・演劇の、もっとも本質的な機能のひとつであることを述べている。

何といっても、みんなはそいつ（Spaß）を欲しがっています。そいつをやリゃなきやなりません。（78行）<sup>(3)</sup>

この見解は傾聴に値する卓見である。「Spaß という要素こそ文学・演劇のもっとも本質的な機能のひとつである」という認識こそが、「ファウスト」受容に際してとくに重要である。この作品は Scherz（冗談、戯れ）だと述べるゲーテの真意は、だから、観客が率直に、おおらかにこれを存分に Spaß として享受して欲しいということなのではなかろうか。

誤解を怖れずに言えば、ゲーテの「ファウスト」こそ、ゲーテ歿後160年経ってもいまだにそれを凌駕する作品が現われない空前絶後の大エンターテインメントなのである。

## 第1章 「劇場での前芝居」（Vorspiel auf dem Theater）について

ゲーテの「ファウスト」には、悲劇第1部の幕前に三つのプロローグが置かれている。「献げることば」「劇場での前芝居」「天上の序曲」である。この三つの中で、Lesedrama として受け止める立場からは、伝統的に「天上の序曲」にとりわけ大きな比重が置かれている。そして不思議なことに何故か「劇場での前芝居」は無視されるか軽視されている。

例えば、「『舞台の前曲』はこの作品に直接の関係はないが、舞台を構成する三人の人物のやりとりは、とくに詩人の感慨がおもしろく、くり返し読まれるに値する珠玉の小曲といっってよい」<sup>(4)</sup>（傍点は筆者）という評言は、いかにもとりすました、通り一遍のあいさつの感じがする。自信が全くないのにひとさまの言葉を論うのは気がひけるが、「『舞台の前曲』はこの作品に直接の関係はない」という点にだけはどうしてもひっかかってしまう。というのも、「舞台の前芝居」こそは、この作品に本質的にぬきさしならぬ深い関わりを持っていると考えられるからである。ここでも、またもや Lesedrama 派と Spieldrama 派との本質的な理解の違いが天と地の距りをもって現われるのである。

Spieldrama 派から見ると、この「前芝居」こそ、「ファウスト」全曲の性格規定をなす、たいへん重要な部分なのである。

作家の書いた脚本は、舞台化されることによってはじめて本来の生命を持つことになる。舞台化はディレクターの手によってなされる。

「舞台の前芝居」の中でディレクターの主張は一貫している。

「わたしは、大勢の人びとを、ぜひ喜ばせてやりたい。／なんといっても、大勢に受けければ、われわれも潤うことになるからね。」（37行～38行）

「だが、何より盛りだくさんにやってほしいね！／お客は見に来る、なんでも見たがるものだ。／だから、いろんなものを目の前にくりひろげれば、／みんな、おどろいて見とれてしまう。」(90行～93行)

——結局、めいめいが自分で好きなものを見つけ出すんだ。／数多く出してやれば、選りどり見どりというわけで、お客はそれぞれ、けっこう満足して帰ってゆく。／あんたが芝居を書くからには、まず芝居気たっぷりにしてもらいたい！」(96行～99行)

つまり、企業家でもあるディレクターは、「大当り」をとりたいのである。そしてリアリストである彼は、どのようにしたらそれが叶えられるかをよく知っている。

ディレクターの「芝居気たっぷりにしてもらいたい」との要請に対して崇高なミューズの使徒にふさわしく、作家は、次のような異議をとる。

「よしてください、あんな雑多な大衆の話は。／連中のすがたを見ると、文学の精神は逃げてしまいます。／わたしたちを無理やりにあの渦へ引き入れる／人波の雑踏など、わたしの目に見えないようにしてください。／むしろ、わたしを静かな天国の片隅へ連れて行ってください。／詩人のためにひたすら清浄なよろこびの花が咲くところへ、／愛と友情が、神々の御手で／わたしたちの心の祝福を創り出し、はぐくんでくれるところへ。」(59行～66行)

「作家が万人の胸をゆり動かすのは、何によるのです？／作家が地水火風の力に打ち勝つのは、何によるのですか？／それは、美の諧調ではないでしょうか、つまり胸から溢れ出て、／ふたたび心のなかへ世界を吸い入れる力です。(138行～141行)

それは、まさしく作家のうちに示顕する、人間の力ではありませんか？」(157行)

作家のこのような現実逃避の態度にたいして、生き活きとした楽しい舞台創りを求める役者である「道家役」(Lustige Person) は次のように主張する。

「みんなは笑いたがっている。笑わせなきゃならないんですよ。／しっかりした作者が一人いるということは、／それだけで、大したことだと、あたしは思いますよ。／自分の思いを伝えて人を愉しくさせることができる人は、／大衆の気まぐれなんぞ、気にすることは無いのです。／そういう男なら、むしろ大観衆を望みますね、／座を湧かせるのも、そのほうが確実ですから。／だから、先生、しっかりして、ひとつ、お手本を見せてください。／空想のうえに、理性、知性、感情、熱情と、／さまざまなコーラスを全部添えるのです。／しかし、いいですか！お道化を忘れちゃいけませんぜ！」(78行～88行)

「なま身の実生活のなかに踏み込むのです！／だれでも他人の知らぬ豊かな人生を生きしており、／そいつを掴みとって見せさえすれば、面白いのです。／採色はにぎやかに、形はぼかして、間違いだらけに真実がちらり、／こうしてできあがったとびきりの美酒で、／世の人はみんな元気づき、ありがたがります。」(167行～173行)

道化役は、後世(Nachwelt)にまで名の残る真正な芸術の創造に固執する作家に対して今の世(Mitwelt)の人々への演劇的效果こそ重要なのだと反論しているのである。その効果とはまさに「気晴らしをさせること」(Spaß machen)なのである。<sup>(5)</sup>そしてその効果は、なま身の実生活(das volle Menschenleben)を舞台に活写することによって実現できると言っているのである。

気晴らしをさせる (Spaß machen) 要素こそ、まさにゲーテが「ファウスト」に注ぎ込んだもっとも重要なものだということが、以上のことから明らかではないだろうか。つまり、観衆を楽しませ (behalten) 気晴らしをさせる (Spaß machen) 空前絶後の一大エンターテインメントとすることがこの作品を創る最も根本的な動機、もしくは狙いだったという点がとりわけ重視されるべきであろう。

前代未聞のエンターテインメントであるためには、ありとあらゆる手段に訴えて楽しみの効果を高めなければならないが、「舞台の前芝居」は、座長の次のような口上で締めくくられている。

「ご存じのように、ドイツの舞台では、／各人がやりたいことを試みる。／だから、わたしに遠慮なく、こんどの芝居は、／背景も仕掛けも、好きなようにやってほしい。／照明なんぞ、日の光も月の光も使ってよろしい。／ふんだんに星もひからせなさい。／水にも、火にも、岩山にも、／それから、獣にも鳥にも、不足はない。／そうして、このせまい板張小屋のなかで／神の創造された全領域を股にかけ、適度な速度で漫遊してもらおう。／天上から、この世をとって地獄まで！」(231行～242行)

ファウスト伝説は、その妖しげな魅力によってすでに当時ひろく民衆の間に、ひろまっていたし、また人気のある民衆劇として人々を楽しませていた。だからファウストは、民衆に大受けをするエンターテインメントとしての基本的条件を充たした絶好の題材であった。少年時代からファウストの魔力に魅了されたゲーテは、自分の「ファウスト」の舞台化をたびたび試みたといわれる。実際にゲーテ自身が描いた舞台コンテがなん枚も残されている。たしかに地獄、現世、天国の全領域をまたにかけてくりひろげられる「ファウスト」劇を従来の狭小な劇場で、未熟な舞台技術で上演することは、無謀な挑戦といわねばならない。にも拘わらずこの間、ほぼ2世紀にわたりさまざまな多くの「ファウスト」上演の試みがくりかえしなされてきている。「ファウスト」の魔力にとりつかれる人間が後を断たないということであろう。これらの事実は、「ファウスト」は、Lesedrama などではなく、飽くまでも Spieldrama だということの疑問の余地のない証しである。

これからもよりましな「ファウスト」の舞台創りへの挑戦が終わることなく続くことであろう。

## 第2章 「面白さ」へのさまざまな工夫

### (1) ファウストの若返り

芝居が面白いということは、観客が舞台に惹きつけられて退屈しないということである。そのためにさまざまな工夫がこらされる。例えば、奇想天外な事や叶わぬ願望の実現である。

「もし人生をやり直せたら」、「生まれかわることができたら」という願いは、一回限りの人生しか生きられない人間にとっては叶わぬ願望である。ところがゲーテは、これをファウストに叶えさせている。これを見せられて、観客の目が舞台に釘づけにされないはずがないであろう。

財産も名声も世間の栄華も、人並の家庭生活も、恋も享楽も、凡そ人間の通俗の人生を全

て犠牲にして学者ファウストは、世界をもっとも深い内部で統一するものの本体を知るために（383行）、学究一筋に生きてきた。

「哲学も、法学も、医学も、それによけいなことに、神学までも、一所懸命勉強して、究められるだけきわめた。」（354行～357行）ところが、「情けない！ばかなおれは、このとおり、以前にくらべて、すこしも賢くなっていない。」（358行～359行）「そして分かったのは、なんにも知ることができない、ということだけだ！」（364行）

という有様である。これは、他の全てをかえり見ず、仕事一筋で停年を迎えた猛烈会社人間とどこか共通している。彼は失ってしまった人生を取り返すためにやり直すほかない。通常では不可能な人生のやり直しが、ファウストには、絶好の狂言まわしでもある、愛すべき悪魔メイフィストの援けにより可能となる。

妖しく愉しい見せ物的場面である「魔女の厨」において、ファウストは見事に変身する。

ところで、生まれ変わったファウストはどんな人生をやり直そうとするのか。彼は、どんな願いも叶えてくれる頼りになる悪魔メイフィストを同伴者として人生の再出発をする。彼はいまや凡ゆる束縛から解放された者となり、時間と空間を超え、人類的体験の全てを自ら体験し尽くそうとする。

限られた短い時間を、狭小な世界の中で、一回限りの人生しか生きることのできないという運命を甘受せざるを得ない者たちにとって、ファウストの再生の人生はまさに夢であり、羨望である。しかも眼前に展開されるのは、きわめて親しみの持てる身近かな俗世界から、華美な大世界、さらには夢幻とおとぎの世界へと果てしもなく拡がり、観衆を飽きさせることがない。話の筋も、甘美な恋愛メロドラマから、哀しく無惨な大悲劇へ、そして一転して幻想と豪華絢爛たる大スペクタクルへ、更には壮嚴な宗教的ドラマへと可能な限りの凡ゆるタイプのドラマが手をかえ品をかえて展開されるのである。

「ファウストの再生とその人生の展開」は、このように効果的に「面白さ」をかもし出している。

## (2) タイムスリップの効果

人間は、「過ぎ去った時」にそこはかとなき郷愁を誘われるものらしい。再生不可能故に、消え去ったものは全て美しく、憧憬の気持をかきたてる。そして過去の再現、再体験は人間にとって果てしなき願望となる。

かくてタイムスリップは、このような願望充足に応える効果を舞台の上で発揮する。「ファウスト」においては、このタイムスリップによる世界がふんだんに出現する。

ファウストは、その幻影にすっかりとりつかれた絶世の美女の誓高いヘレナを求めて、ワーグナーが創り出した人造人間ホムンクルスとメイフィストと共に、古代ギリシャの世界へタイムスリップする。悲劇第2部第2幕第3場、「古典的ワルブルグスの夜」から第3幕全部がそれである。

しかもその中で、ファウストは恋い焦がれるヘレナとの恋愛を成就するばかりか、あまつさえ結婚までした挙句、恐れ入ったことにオフィオーリオンという男子までもうけてしまうのである。

この破天荒な行状が観衆の好奇心を握んで離すはずがない。

ゲーテの劇作家としての巧みさに舌を巻かずにはいられない。

### (3) 時代諷刺

落語や漫才といった笑いを売り物とするエンターテインメントが、笑いを創るためいわゆる「ドタバタ」の方法に拠ることは珍らしくない。しかし「ドタバタ」には、見えすいた誇張やわざとらしさがすけて見えてしまうので、笑いに空虚さがこびりついてしまう。自然にこみあげる健全な笑いは、方法や内容の違いはあっても、支配的、権力的なものへの批判を基本とする諷刺や皮肉から生まれるものである。

「ファウスト」には全曲至るところにこの支配的、権力的なものへの痛烈な批判が塗り込められていて、時としてニヤリとした笑いで留飲を下げさせられ、また時には「やった！」と腹からの笑いを抑い切れなかったりする。

「悲劇第1部」夜の場のファウストの冒頭のせりふからしてそれである。

「ああ！おれは、哲学も、／法学も、医学も／それによけいなことに、神学までも」  
(354行～356行) (傍点は筆者)

「神学」がこれを聞けばどんなに気嫌を損ねることだろう。

「書斎の場」で、ファウストとメフィストとの賭けが成立した後、ファウストが旅支度をしている間、ファウストに変装したメフィストが弟子入り志願のうぶな学生と交わす対話は、権威主義的大学に対する痛快極まりない批判となっていることは、つとに広く知られているところである。例えば、

「毎日、5時間講義がある。／鐘が鳴ったらすぐに教室へ入る、／前もってよく予習をして、／一節一節よく調べておく。／すると、あとではっきりわかるが、／先生は本にあること以外は何も言わぬものだ。」(1956行～1961行) (傍点は筆者)

「その神学という学問はどうかというと、／道を誤るのを避けることが、じつにむづかしいのだ。／神学のなかには、かくされた毒素がたくさん入っているが、／その毒が、薬とほとんど見分けがつかないのだ。／まあ、そのさいも、最善のみちはといえば、ただひとりの先生について、／その先生の言葉を信じて疑わぬことだ。」(1984行～1989行)

このように抜き書きを始めると、とめどもなくなる。

「魔女の厨」での魔女の唱える「魔女の九九」に対するメフィストの批評もふるっている。

「あれには、わたしもずいぶん時間をつぶしました。／だって、およそ辻褄の合わないことは、／馬鹿なものにも利口なものにも、同じように神妙に聞こえますからね。／あのやり方は、古くて新しいんです。／三位一体とか一体三位とかいって、真実の代りに嘘をひろめる、／これはいつの時代にもある同じ手口です。」(2556行～2562行)

「散歩」の場では、こっそりグレートヒェンに贈った装身具を牧師が持っていったことに腹をたてたメフィストのせりふがこれまた振るっている。

「坊主は、<sup>いさぎ</sup>経緯をろくすっぽ聞きもしないうちに、／代物を見ただけで、よだれをたらしやがった。／言いも言ったり。『それはそれは、ご奇なこと！／欲を捨ててこそ、益があるというもの。お寺の胃袋はいたって丈夫、／これまでしたたか地所を呑み込んだが、／ついぞ食べ過ぎたということはない。／ご婦人方よ、不義の宝を／消化せるのは、ただお寺だけじゃわ』」(2832行～2840行)

このような諷刺によって惹き起こされる笑いが、観衆に Spaß を与えることは言うまでもなからう。

#### (4) その他奇想天外のアイデア、修辞法など

観衆の心をとらえて離さぬ要素に奇想天外な思いつきがある。例えば、賭けが成立してメフィストがファウストを書斎から連れ出す時、メフィストはなんと！空飛ぶマントを使うのである。さしずめヘリコプターだと思えば、今日ではさして奇抜とも感じられないが、これが200年も前のことだということを考慮に入れば、この奇抜さは観衆を十分楽しませるものたり得たであろう。

さらに驚くべきことは、フラスコやレトリートの中から人造人間を創り出すというアイデアである。この奇想天外な発想が観衆に与えるインパクトの強烈さはあらためて言うまでもなからう。

さらに、湧き溢れるイマジネーションを形あるものとする詩的文体と入念に練られた修辞法については、文字どおり「詩聖」の名にふさわしいものがある。これが登場人物それぞれの明確なキャラクターと見事な対応を見せていて、それがまた独特な Spaß を産みだしているといえる。

#### ま と め

以上、ゲーテの「ファウスト」は、飽くまでも演じられ、観られ、そして享受される、Spaß を本領とするドラマであるという点に焦点をしばって考察した。こういう観点から見ると「ファウスト」は「難解で、退屈」だというレッテルが、「痛快で面白い」というレッテルに貼りかえられねばならないだろう。

「本当の演目に残る作品、つまりテーマがきわめて普遍的で、劇場に最も普遍的な芸術を扱う機会を保障してくれる戯曲というのはドイツには殆どない。じつのところ『ファウスト』だけだ。」と言うブレヒトの言葉は、この作品が、時代を超えて常に新鮮な生命力を持って甦る古典だということを述べているものと理解できるが、それは、観衆に盡きることのない豊かな Spaß を与え続ける作品のみが持つ特性であろう。

#### 注

- (1) 柴田翔：「ゲーテ『ファウスト』を読む」岩波セミナーブックス11, 1985, P.4.
- (2) 「エッカーマンとの対話」1827年5月6日 山下肇訳参照。
- (3) 道家忠道：「ファウストとゲーテ」郁文堂, 1979, P.94~95.
- (4) 小栗浩：「人間ゲーテ」岩波新書46, 1979, P.187,
- (5) 小西悟：「『ファウスト』『劇場での前芝居』に見るゲーテの芸術・文学論」, 「人文学報」第200号, 1988年, P.68~69, 「座長は『群衆を楽しませ (behagen) たい』という。では behagen とは、どういうことなのか。座長がこの言葉を使うとき彼にとっては、芝居の目的は明らかに人びとを〈楽しませる〉ことである。庶民大衆にとって『生きる』ことがかくも厳しい営みであるからこそ、彼らには〈楽しみ〉が必要なのである。したがって、その楽しみは、心地よい、ゆったりした気分の楽しみであり、〈気晴らし〉 Spaß でなければならない。それにまた, „alles frisch

und neu und mit Bedeutung auch gefällig“であることが望ましい。そのようであって初めて、人びとを behagen させることができる。ここにはゲーテの文学観・芸術観があらわれている。文学・演劇は、何よりもまず人を楽しませるものでなければならない。(中略)道化はこれを”Spaß machen”という言葉におきかえる。(中略)Spaß machenこそ、まさに一時の気晴らし、息抜きであって、毎日を厳しく生きている庶民大衆のものであろう。」

以上の見解もまさに卓見であり、啓発されるところが多い。

## 参 考 文 献

上記注記に示したものの他の主なもののみ列挙する。

Johann Wolfgang von Goethe-Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, 1981.

Th. Friedrich L.J.Scheithauer : Kommentar zu Goethes Faust, Philipp Reclam Jun. Stuttgart. 1960.

井上正蔵訳「ファウスト」,「世界文学全集」7. 集英社, 1976. 「ファウスト」の訳文は、井上訳を主に、その他森鷗外、相良守峰、久保栄、高橋義孝訳等を参考にした。

ジャギニャン著、伊藤・植村訳：「評伝ゲーテ」未来社、1960.

小栗浩：「ファウスト論考」, 東洋出版, 1987.

「ゲーテ全集」全14巻, 潮出版

「ゲーテ全集」全12巻, 人文書院

Heinz Hamm : Goethes >Faust<. Volk und Wissen, Volkseigener Verlag Berlin, 1981.

Horst Hartmann : Faustgestalt-Faustsage-Faustdichtung. Volk und Wissen Berlin, 1982.